

OfByForコラム 地域の 地域による 地域のための Something NEWS

第23回

災害は忘れたころにやってくる ——フェイス・フリーの災害対策

一般社団法人 洗楓座
一般社団法人 e f c o . j p
代表理事 佐藤建吉

故を体験し、反省し、目標の再設定は為されていくのだろうか。原発に対する国民や社会の大多数の選択は、心情的には運動停止や廃炉化ではなからうか。これがPDCAサイクルには反映されていない。現場や地元の意見でなく、政治という判断が優先されるからであろう。政治は現実よりも、見えない・見せないという思惑や都合が優先され、正当化されるからであろう。

▼忘却曲線
過去の事実は歴史とい

▼フェイス・フリー
筆者は、本コラムの第19回(第89号)に寄稿したように、千葉県・房総中部の上総地域の市町でキャバパンする「上総まちなか大学院」を主催している。12月2日、いすみ市で行った「まちなか大学院」では、当地が房総沖地震や津波の心配が

あるので、防災に関係し「フェイス・フリー」という新しい概念を、講義に取り上げた。フェイス・フリーは、グレイズ(平常時や災害時と区分された局面)を取り払って、平常時と災害時の両方で差が無く、いつでも価値を持つことが有益であるという発想から生まれた。この概念を実現する手法、設計、商品などが、「フェイス・フリー」である。

この妙味な発想を学生・院生時代に考えて修士論文としたのち、実務業務を体験し、「フェイス・フリー」を普及するために起業した佐藤唯行氏に、その講義をお願いした。

この発想を具現化できるのは政治家であると考え、地域の市長・県議・市議・町議に、この講義への受講して頂いた。また行政からは、危機担当課長が参加して頂いた。こうして、今回のまちなか大学院は、政策大学院の様相となった。

講師の佐藤氏は、最初に、年代・時系列で示した災害史を投影して、受講者に問うた。この凶何を感じるか?…早速、

意見交換が始まった。災害が発生する理由は何? 自然環境の変化? 非日常的?…

答えはなかなか見つからない。その理由は、平時ゆえに災害や防災が身近でないから、つまり、非日常性が関係している。防災以外に重要なことがあり、優先度が低い。また、もしものことにコストを掛ける余裕がない、等々の理由や言い訳が出来る。

こうした背景を体験し、佐藤氏が発想したのが「フェイス・フリー」という概念であった。非日常性ではなく、日常も有効で、価値があり、便利であるようにしたいというのが、思いであったという。同時に、日常も快適であり、クオリティ・オブ・ライフ(QOL)が高くなることを条件としたという。

例えば、フェイス・フリーの商品には、平常時は軽く収納スペースの大きい普通のランドセルであるが、被災時には浮力が大きく子供を水中でも浮かすことが出来る津波対策機能をもつランドセルがある。他にもいろいろ考えられ、あるいは既に製品でも、フェイス・フ

リーの概念を見出すことが出来る。11年の東日本大震災に於いても、「自助・互助・共助・公助」は、発動された。ところが、2011年3月に仙台で開催された第3回国連防災会議「フェイス・フリー」での折りに、「公助」は、控え目にして、「自助・互助・共助」だけを、主役にしたい公側のプレゼンが目立った。

これに対して筆者は「公助」を明確に位置づけるべきである旨のコメントをしたことを思い出した発言であると同えた。

▼23世紀を考える
哲学者であった今道友信氏は、23世紀を意識して生きなければならないという。これは、

と述べた。今道友は、科学技術がつくる環境の中で私たちが生きる場(生圏、オイコス)を保全する規範を「エコエティカ」として、提唱し他界した。その思いには、

コスト高を伴うハード面での対策でなく、平時の暮らしにおいても、災害時に対応できるように気を配った「フェイス・フリー」の商品や仕組み、あるいはソフトやシステムの適用である。より長いスパンで考え未来に向けて行動しなければならぬ。これらは明確にOfByForの切り口でもあると、いえ



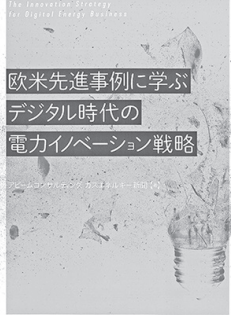
新しいキーワード
フェイス・フリーとは

上総まちなか大学院

連載・イベント

書評

『欧州先進事例に学ぶ デジタル時代の電力イノベーション戦略』 アビームコンサルティング、ガスエネルギー新聞 著 /毎日新聞出版 刊



2016年4月に実施された電力小売全面自由化。2017年4月にはガス小売も全面自由化された現在、国内のエネルギー市場は大きな転機を迎えているとされる。

「自由化の先」見つめる 電力ビジネスのあり方とは?

自由化によって期待される効果のひとつに、新規参入者による市場の活性化がある。本書でも異分野からの注目も多分に意識して、電力事業の専門的なフレーズを用いつつ脚注も多くなり、どの業界の事業者でも読み進むことが

つぎのページへ